

疎開先の福井での大空襲

●方南一丁目

島田 崑乃

(大正七年生まれ)

昭和一八年七月一日、夫が横須賀海兵団へ応召になりまして、当時二歳四か月と一歳八か月の女子がおりまして滝野川に暮しておりました。

昭和一九年の一月と同二〇年の三月に主人は墓参り休暇をとって帰宅致しました。時折B29の空襲がありました、一月に墓参りに親子久しぶりでおにぎりを作り、束の間のひとときをお墓の前で過しました。

それから昭和二〇年になり、一月二月と空襲ははげしくなり、毎日、防空壕の中で夜中でも子供を起こしての日々でした。子供にはオーバーを着せ、靴をはかしカバーをつけ、寝かせておりました。さぞ寝苦しかったと思います。それから三月九日の下町の大空襲で、防空壕の中から、真赤な空から青くきら／＼光って木の葉のように落ちて行くB29を見ながら一夜を明かしました。それをみて義兄が福井市の遠縁に三月一九日、御近所の方の御好意の手作りのおまんじゅうを頂き、大きな風呂敷一ヶ持ち、東京駅より朝五時ごろ旅立ちました。まだ寒かったように思いました。

途中大垣駅だったと思います。下車をしいられ、待合室で子供といるところを、そばにおられる方の口添えにて、主人の面会に行くと云えば泊めてくれると申され、やっと旅館に一夜泊めて頂きました。布団は一枚にて子供だけ寝かせ私は座っておりましたら、その夜は名古屋の大空襲でした。真暗で、一夜の旅館の部屋ですごい空を見ながら、知らぬ土地にておそろしい思いをしました。その日に福井に着くと思っておりましたがそんなわけで福井に着いたのは、翌日のお昼過ぎでした。その間、米原／＼福井間で軍人さんに長方型の飯盒ごうを中身ごと御自分は食わず全部頂き、子供たちは大喜びで頂きました。今でも有難く忘れません。それから五月に、東京より荷物が届きまして、嬉しくて／＼夢中で荷をほどきました。申しおくれましたが、私共親子は福井市手寄上町という地名の福井駅より近い蔵くら一間を借りました。駅に近いのでもしまた先々空襲でもあつてはと、主人の衣類は全部ほかず、吉田郡下志比村というところのお家に預けました。

それから二か月もたたない間に、福井の大空襲（七月一九

日未明)があり、子供二人を連れ命からく土地の方々の逃げて行く方へ、焼夷弾の落ちる中軒下に入ったりました。目の前が光る中倒れる人もいました。やっともう駄目かと思いながら、おいも畑の先の川にたどり着きました。一人おんぶで一人手を引き川の中へと入りました。隣組の旗が川の真中に立ててあり、川の向こう側ではどかんくと火の手が上り、私など後で気がつくとき久留米がすりのモンペもところ／＼穴があいておりました。火の粉でした。

明方空襲が止み、川よりは上り、福井で雪国なので、石炭の小さいの(ちよっと名前忘れしました)が各家に山と備えてあります。それだけが火のかたまりであちらこちらにありました。そのそばに行き、夏でしたが一晩水の中でしたので、ぶる／＼ふるふる身体をかかわかしましたが、顔だけが熱くなり顔をそむけました。その折福井の方言で「ねんねがない／＼」とさげんでいる人、名前を声をかぎりに呼んでいる人、私はまあ皆火傷もせず、ほっとしていましたが、また二人とともに人の行く方へとはだして逃げて、お寺に着きました。途中荷車に火傷のひどい人とすれちがいました、道端に練炭の燃え終わりのように指を入れればくずれるような死んだ人々。その日はお寺で一夜を明かし、子供二人と寝るのがやっとでした。

翌日、焼けあとに行く途中、一家全部の方々らしい足と顔が出ていて、とたん板がかぶせてありました。それがあちらこちらにあり、それを見ながら蔵の前にたどり着きました。

もうあとかたもありません。福井の県庁からはまだ窓から火がめら／＼出ておりました。防空壕からトラックに何台も亡くなった方を運んでいました。生きのびて、吉田郡下志比村に逃れ(今現在は地名が変わっているようです)、終戦を迎えました。

主人は、私共が福井へ疎開した後、横須賀気付から青森の大湊気付に変わり、終戦の二日前の八月一三日、厚賀沖で六号海防艦が沈没致し二〇〇名の方々とともに戦死致しました。私共親子は(私は八月八日吉田郡にのがれた後、長男を出産致しました)三人で杉並の私の実家が焼けなかったのでひとまず落着きましたが、主人が帰らぬまま四七年間現住所で暮して参りましたが、私の父母も亡くなり、私も三〇年働き、子供たちも元気で成長致しまして、皆親孝行してくれます。

一人暮らしをしておりますが、御近所の方々も皆、良い方々だし、毎日感謝致しながら暮しております。最後に私はもう先は知れておりますが、先々私共のように幸せな家庭を引きさかれ、父を知らぬ子供たちが出ないよう、平和な国でありますよう、くれぐれも祈っております。

学童疎開と私

●和田三丁目

常山 喜久子

(大正一二年生まれ)

戦争の激しくなった昭和一九年、私は新卒で渋谷区の千駄ヶ谷小学校に勤めました。直ちに集団疎開!! 私は四年生六八名の子供たちとK先生とで、静岡県に行きました。

一 静岡県長源寺での生活

八月一八日、父母や同僚に見送られて、東京駅を出発しました。「泣いてはいけない」と心に強く思いながらも涙が溢れてきました。静岡県榛原郡吉田村の山寺、長源寺での生活が始まりました。暗い本堂にぎっしりふとんをしいて初めて寝た夜、寂しくてこわくて、寝つかれませんでした。夜中にトイレに行くのもお墓のある傍にある所までいかなければなりません。子供たちの中には、シクシク泣いている子もいました。

それから翌年の六月初めまでの生活……。もう五〇年近くなっているのに、私は一生忘れられません。とてもつらかったです。

子供たちは村の学校にいたりお寺で学習をしました。お

寺さんや村の方々のご好意で食料もいろいろご心配して下さいました。でも育ち盛りの子供たちにとっては、絶対的に足りませんでした。

村の畑で生いもをとったり、お茶の実を食べてあわててはき出したり、イナゴなどは貴重な食糧でした。そつとお墓に上げてあるお供え物を盗んだり、それは可哀そうでした。そしてだんだん痩せ、眼ばかりギョロギョロし、身体や頭にはシラミがわくし、寮母さん方も大変でした。

おねしよをする子がいて、恥かしそうに泣いていてとても可哀そうでした。私はそつと裏のお墓の方にいつて乾かしたこともありました。何といつても私はまだ新卒、二〇歳の頼りない先生で、子供たちにも申し訳ありませんでした。

そのうち、空襲も激しくなり、学校も子供たちの家も焼け、親の消息もわからなくなった子もいました。とうとうお寺の裏の山にも軍隊が入り、高射砲をとりつけ始めました。ついに、ここも危険!! というところで、軍の命令ということで青森県の弘前市に再疎開ということになってしまいました。

夜なべにおにぎりをつくり、荷作りをして、汽車にゆられ、四〇時間余もかかったのです。途中、横浜も東京もまだまだ焼け跡から赤々とした火が見えていました。汽車は何度も何度も止まりました。無事に着くかしら、とても不安で心配しました。

二 弘前での生活

弘前市にやっと着きました。六月初めなのに、弘前城には八重桜がポツテリと咲いていました。疲れた長旅の私たちの心を慰めてくれました。

岩木川のほとり、前は料理屋さんだった所に住むことになりました。窓から見ると、岩木山がくつきりと見え、「ああ遠くへきてしまった」と、寂しい思いでいっぱいでした。

戦争はますます激しくなり、青森市が空襲で焼けていて、その火が赤々と見えました。食糧は乏しくなるし、子供たちの勉強より野菜の買い出しに遠くまでいかなければなりません。夜なべに新聞紙でりんごにかける袋を張り、次の朝にそれを持って農家にいくのです。

そんな時、また大変なことが起こりました。大雨で岩木川がはんらんし、橋も人家も流され、私共の寮も浸水してきたのです。電気は切れ、真暗な中を半鐘の激しく鳴る音を聞き、子供たちはリュックを背負い、水の中を渡って、山の方のお寺まで逃げたのです。

空襲の火を避けようと来たのに、今度は水びたしにされ、

何とむごいことでしょう。それからの生活は前にも増して苦しくなりました。

三 終戦からの生活

八月一五日のラジオ放送を子供たちと聞きました。でも雑音が激しく意味がわかりませんでした。そのうち寮長先生が「日本が負けたんだよ」といわれ、「ワアッ」と涙を流し男泣きをする姿に、やっと意味がわかりました。子供たちもいっしょに泣きました。

それからしばらくして、親や親戚の方々が迎えに来られました。でも汽車の事情はきびしく、また引き取り手のない子供もいたのです。残された子!! とても可哀そうでした。寮長先生も帰京され、若い私は寮母さん一人と残った子供たちとの生活が続きました。着る物も食料もなく、ほんとうにみじめな生活でした。

一月半ば、やっと子供たちと東京に帰れるようになりました。学校に着きました。何とむごい姿でしょう。防火壁一つと、プールだけが残り、無残な様子でした。

それから戦後の苦しい生活が始まりました。青空教室、兵舎の焼け跡での勉強でした。あの時の子供たちはもう五七歳です。

「自分たちの子供には、再び集団疎開をさせたくない」というのは、私の強い願いです。

平和の尊さが身にしみた体験です。

学童疎開記 (抄)

●善福寺一丁目

中田 重三郎

(明治四二年生まれ)

●松根掘り

「Kさんは脚が悪いで、センセ代りに行ってくれんか？」

と、わざわざ隣組の組長さんが訪ねて来た。松の根っこを掘り取って供出するのだと。隣組に割当てがあつて、若い者はいないし、じいさん・ばあさんばかりで、割当て量をこなすのは難しいという。

「いいよ。私も隣組の一員ですよ。行きましよう。山は慣れてるから。力はないけど大丈夫、やれますよ」

と、引き受けた。松根っこを掘って松根油をとり、ガソリン代わりに使うので御奉公の一端だという。

山はどこの山のを掘りとってもよい。ただ枯れてる木の根っこに限るとか。

あっちこっちと山の中を歩いて、松の切株を見つけて掘り取るのだが、大きな株になると、シャベルや鍬だけでは手に負えない。まさかりで割りを入れて掘り取る。掘り上げた土が崩れて埋まってしまう。一本掘り取るのが容易じゃない。そこで考えた。崖状の斜面をねらえば、掘った土は下へ落ち

る。掘り取りがラクだと。

今度は面白いように掘りとれる。長いやら短いやら、かたまりのゴツゴツしたのやら。だが運び出しが大変。炭俵を背負うようなわけにはいかない。隣組長さんの用意した荷車は遙か下だ。束ねて背負ったり、手に抱えたり、一度では運び切れない。『まだあるの?』と手伝ってくれるおばさんと一緒にもう一度。ともかくにも一日は暮れそうになった。組長さんの所でお茶によばれ、

「もう一日頼む。割当て量に少し足りない」という。明日を約して学寮に戻る。

●飢えと蚤のみとしらみ

「ゆうベツマミグイがコッソリ台所に来ました」

と、寮の奥さん。とうとう来る所まで来たなあと、がくん。第二回目の疎開集団は一年生のチビさんも一緒に来た。先に来ている者の弟や妹が多い。男の子も数が増した。チビさんだが食欲は盛んだ。それなのに東京都加配米というのが打ち

切りになった。配給量がへったのだ。夜半に忍び込んで飯櫃めしびつに手を掛ける姿を想うと痛く悲しい。奥さんの顔をまともに見られない。

「いや、こちら悪かったんです。うっかり調理台に残飯を置き忘れたもんですから。気をつけます。お子さんたちは叱らないでください」

と、言われたら余計悲しくなった。

この第二回目の疎開集団が来てから、更に一層困ったのは肌じらみだ。子供たちは来たが、別送の荷物が来ない。ほとんどが着た切り雀。着替えがないので、洗濯ができない。シラミが湧く。何とかダブダブの下着を借りさせて洗濯。ズラリと縫い目に並んだシラミの卵は洗濯では落ちない。「どうしましょう」と寮母さんに相談され、「熱湯につけたら？」という

「それが燃料不足でしょう。調理場にお湯をもらうのは気の毒で」

という。しょうがない。石油カンをもらって来て、中に木の板を切って井桁に組み、水をヒタヒタに入れ、その中へ洗濯した物を入れて、心細い程の火鉢の炭の上のせて蒸す。臨時の蒸し器だ。とても間に合わない。仕方なしに、川原で枯草や枯枝を集めさせて、子供たちにあたらせながら蒸す。

「これがフカし芋だといいたがなあ」

と。子供の中には芋を想い起してつぶやく。ひもじいのだ。これじゃダメだ。寮の奥さんに頼んで、少し遠い所でも止む

を得ない。買い出しに行くかと心に決める。

シラミ退治に苦勞している上に蚤だ。これも始末に困る。

町にも東京にも除虫剤が無い。太陽光にさらす、ふとん干しがセイゼイ。その干場がない。屋根にとまって寮主に願ひ、許可をもらったが、女手ではムリ。手伝いを頼んで屋根に登る。何とか蚤を追っ払うだけ。空しい限り。休憩後、

「買い出しに行きましょう。車は僕が曳く。奥さん知り合い無いですか？」

「あるけど遠いの。四里近くあるし、行っても取締りがキビシイ。メンドウよ。それにお金だけじゃダメ。仕事着をほしがるの」

と、むずかしそう。荷物の中から着古した登山用の衣類を揃えて、「これどうぞ」と奥さんに見せたら、

「あら、良いわねえ」

一日がかりになるといので、明日を約した。統制外（規格外）のクズじゃががねらいだ。

夕方、ふとんを取り込む。

集団疎開・詩二編

●上荻二丁目
牧寛

(昭和九年生まれ)

一 そのころぼくは

袋入り・歯みがき粉から食べ始めた。

数日たつと絵の具は甘いということがわかった。

けれども白絵の具が一番味がよいということになった。

すると白を持っていている者は一人もいなくなった。

別れる時その娘の……

かあさんが炒った大豆を沢山

布のお手玉に入れて渡した。

時々女の子は糸をほどこいてふとんを被り

皆に隠れてポチポチ食べる。

つつじの花はりんごの味

すっぱくておいしくて次から次へむしって食べた。

たんぼで殿様蛙が鳴いていた。

ひつつかまえては皮をはぎ、焼いて食べた。

山かがしが木にとぐろを巻いていた。

棒でたたきおとし、石で頭をつぶした。

首をちよん切って皮の端を指でめくり、ずるずるぬがせた。

へびは四つに切っても八つに切ってもいつまでも動いてい
た。

骨のついたまま全部つけ焼にして

一人一切れずつ

先生にもあげた。

それからあとはかっぱらうより方法がなかった。

缶づめや御飯

夜中に起きて自分勝手食ってしまう。

昭和二〇年四月

渋谷区千駄が谷仰徳国民学校で

残留組学童を富山県東となみ郡井ノ口村に強制集団疎開し
た。

十一月、東京へ帰ってきたとき

ぼくらの校舎は全部やられて

基礎コンクリートと門柱だけになった。

そしてバラックの裁判所が学校になった。

それがいまの鉄筋五階建ての原宿警察署である。

二 遅食い競争

おたがいに

配られた飯の量を横目で確かめあった。

みんな板の間の食堂で

かあさんたち縫ってくれた座布団敷いて
待ちくたびれた。

先生が三人そろって席につく。

御飯はかめばかむほど

甘くなりおいしい。

栄養の吸収が良くなる。

全員一口三〇回以上かめ！

三〇分より早く食事を終わらすな！

おかずはきゅうりの煮つけ

缶づめがちよびと……

それで「遅食い競争」が始まった。

あるとき五年生のぼくは

一番になってやろうと思って一〇〇回ずつかんだ。

まわりのやつらはみんなあきらめて

箸を置いてしまった。

いよいよ今日こそトップだ。

けれども向かい側にいるM君のどんぶりを……見るとまだ半

分中味が残っているではないか。

この子は一年坊主なので

盛りつけされた量は最も少ない筈だが

彼はとうとう一粒一粒米を拾って

口へ運んでいるのだ。

もぐもぐ……もぐもぐ……。

ついに一騎打ちはぼくの負けとなった。

早く食い終わってしまった生徒は正座

全員が済むまで席にいたままである。

立つことを許されない。

先生たちだつて命令したてまえ。

いつもまん中よりは遅く終わるのだ。

付記

新宿「伊勢丹」の角から甲州街道を横切り、明治通りを進

む。代々木駅へ曲る右側の横丁の先に大通りに面して、東京

都教育委員会の小さな金属板の告示がある。

「この場所はかつての仰徳国民学校の跡地である……幾多

卒業生を世に送り出したが、戦禍で消失した……（大意）」と

ある。

校庭のあたりに、初期の低層都営住宅が雑然と建てられて

いる。